

# サンディエゴより

—中嶋 嶺雄—

## 人種と気候 別の国のよう

先週はニューヨークの時事トップ・セミナーで中国問題を講演した後、ハーヴァード大学での所用のためボストンに行っていた。サンディエゴでは九月になって、日中の暑さを強いられていたのに、ボストンにはもう秋の気配が漂っていた。ニューヨークとロサンゼルスという全米第一と第二の都会を対角線で結び、そこから北へボストン、南へサンディエゴと地図を辿って見ると、アメリカ合衆国の東北端と西南端という二つになり、両者の間は米国のなかでも最も遠く隔たっているのだから、気候が大きく違ふのは当然である。

だが、気象・風土ばかりか、ほとんどすべての点において、サンディエゴとボストンは大きく違っていて、やはり南カリフォルニアの最南端サンディエゴが米国の中でも特殊な地域なのであろう、ここからボストンへ行くとまったく別の国に来たように感じられる。サンディエゴはほとんど毎日が見る太陽と青空の下にあり、ヒスパニック（メキシコ系アメリカ人）の人達も多いのに対して、ボストンはまさに「ニューヨークランド」としてのアメリカであって、たとえ気候は厳しくても、知的なたたずまいのもとで学問をするには大変ささわしい環境である。

学問の殿堂が集まるボストン  
チャールズ川を挟んで

だわすか数々の区間に、ハーヴァード、MIT（マサチューセッツ工科大学）、それにボストン大学といった学問の殿堂が集中しているのも、いろいろの点で好都合だ。私はハーヴァードの碩学、故ジョン・K・フェアバンク教授が編集した「ケンブリッジ中国史叢書」に執筆していることもあって、ハーヴァードには以前から何



近で世界を驚かせたH・キッシンジャー博士が国際関係論を教えていたり、駐日大使も務めた故E・ライシャワ教授がアジアや日本の歴史を講じていたり、最近では『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の著書で知られるエズラ・ヴォーゲル教授の存在などもあって人文・社会科学が日本人には一般に馴染み深いと思われるが、そこ

## サンディエゴとボストン

かと縁が深いのだが、理工系や医学系で知られるMITやボストン大学にも、中国研究や政治学の分野で優れた学者が多い。ルシアン・パイ教授（MIT）やマール・ゴールドマン女史（ボストン大学）などがその代表である。ハーヴァード大学という、世紀の米中接

見た。すると驚いたことには、最近名声の高いハーヴァードの生化学や数学などの自然科学部門が、長男の所属する歴史学科と同じ学部・大学院に入っているのである。そこにはハーヴァードの建学の理念が今も生きていて、日本の大学が現在、旧制高校的な教養学部を改組しつつあることは対照的だといえよう。

の学芸・科学 (Arts and Sciences) 学部および大学院は、文字どおり文系と理系の総合のうえに成り立っている。

たまたま私の長男がフルブライト奨学生としてハーヴァードの大学院に在籍しているの

係・太平洋研究大学院 (IP/PS) なのがある。ハーヴァードのアジア学・中国学などは大西洋とヨーロッパを経由し、西洋の学問体系を通じてアジアや中国を見ようとしているのであって、太平洋の側からもっと直接的にアジアや中国を見るべきだというわけでもある。したがって、方法的にも従来の伝統的な学問とは違って、

伝統的学風に挑戦する心意気

このようなハーヴァードの学風を批判する

るサンディエゴなりの新しい息吹きを感じられなくはない。

そのようにでもして自らを支えてゆかないと、サンディエゴの気候や風土はとも研究室で学問などやっては

米社会でも 対照的な風土

このようにサンディエゴとボストンは、同

シアメリカ社会でも、最も対照的であるだけに、永くハーヴァード大学の教授を務めたライシャワー博士が引退後はボストン（ケンブリッジ）からサンディエゴに転居して、ここで余生を送られた理由もよく分かる。博士はサンディエゴでも最も閑静で美しいラ・ホーヤ (La Jolla) の高台に住んでおられた。そのお住まいから海岸までのハル夫人との散策をこよなく愛好され、その遺骨は三ヶ離れた海面に遺言どおりに撒かれたとのことである。

筆者の中嶋氏は近く帰国されますので、サンディエゴよりは今回で終わり、次回からは再び望岳山荘にてとなります。(編集部)